

第一回 【国語】

二〇二六

- 問題文は14ページです。
- それ以外に問題、答案用紙の2枚があります。
- 時間は50分です。
- 答えはすべて答案用紙に書きなさい。

第一回 国語科問題文

二〇二六

[一]

つぎの文章を読んで、別紙の問題に答えなさい。

ゴトン。車体がゆれたとたん、なにか得体のしれない熱いものが体をつらぬいた。

——行こう。あの町へ。

二〇二〇年ごろからはじまり、世界中を混乱こんらんにおとし入れた新型コロナ騒動そうどうは、ようやく終息のきざしを見せていた。十一月には修学旅行が予定されている。行き先は九州。修学旅行のことを考えると、ゆううつでたまらない。人といるのは苦手だ。緊張する。なのに二泊三日もいっしょなんて考えられない。ムリ、ムリ、ぜったいムリ。第一の関門は班決めだった。

「せっかくの旅だから、自分たちで決めていいぞ」

と、先生がいったとき、教室は大歓声かんに包まれたけれど、野々歩ののほはスツと体が a のを感じた。

——ひとりだけ残されたらどうしよう。それを考えただけで、いたたまれなくなる。ボッチになるのが怖くて、綾香あやかたちのグループにしがみついていた。綾香たちもノリの悪い野々歩をもてあましつても、容認にんしてくれていた。ところが、さまざまな規制が解除された夏休みに興奮ぎみのみんなが、やれ地域の祭りだ、隣町となりの花火大会だと盛りあがっていた七月、綾香にいわれた。

「野々歩って、目が笑ってないよね」 心臓が止まりそうになった。

「え？ そ、そうかな」（１）ような笑いでごまかしたけれど。

——見透すかされてる。そう思うと、その日以来、みんなと目をあわせるのが怖くなった。

そうしてはじまった夏休み。野々歩は、ラインで誘さそわれた地域の祭りにも、隣町の花火大会にも、参加しなかった。

ツクツクボウシが鳴いて、二学期がはじまった。

「野々歩、お祭りも花火大会もめっちゃ楽しかったのに、なんで来なかったのよ」といいつつ、これ見よがしに思い出話に盛りあがるグループの中にいて、野々歩はまるで自分ひとり、カプセルの中に閉じこめられたみたいだった。

緊張つづきの一週間が過ぎたころ、野々歩は体のバランスをくずした。体半分は湿疹^{しっしん}がでた。座^{すわ}るとイスにあたる部分が痛かゆいし、夜、眠れなくなった。夜中かゆみで目を覚ましリビングに行くと、父親がひとりではんやりテレビを観^みていた。ソファにもたれかかったまま、音量を落とそうとリモコンに手を伸ばした父親は、首だけ野々歩にむけた。その姿がすぐく年をとって見えた。

「どした？ 眠れないのか」「なんか、体がかゆくて痛い」「蚊^かにくわれたのか」「蚊じゃない」

「どれ、見せてみる」ようやく父親は体を起こした。こういうとき母親がいたらと切実に思う。

「お母さんに電話するか？」（2）ようすまなざしが、うつとうしかった。

「いい！」

へ あ へ

父親に気をつかわれている自分がみじめだった。

——お母さん、お母さん、お母さん！ 中二なのに、まるで（3）みたいに心の奥で母親をよんでいる自分にもイラついた。

——なんで帰ってこないの！ はっきり聞けばいいのに、聞けずにいた。おばあちゃんの葬式^{そうしき}のあと、後片づけのためにと実家に残ったまま、母親は帰ってこない。

県庁所在地の駅でほとんどの乗客がおりた。高校生たちは全員、人混み^{じんごみ}をぬうようにダッシュしていった。

——みんな、ちゃんと学校行くんだ。見送る野々歩のみぞおちがぎゅっと縮んだ。学校をずる休みするのは、はじめてだ。今ひきかえせば三時間目には間にあうだろう。それでも野々歩はおりなかった。心はすでに母親のもとへとんでいた。母親はいつもパワフルでにぎやかな人だ。そのうえ、超^{ちよう}がつくほど負けずらいで、ひっこみ思案^{しあん}の野々歩にイラついていてる節があった。保育園のころ、運動会の親子リレーで手首をつかまれ全力疾走^{しきそう}させられたことがある。宙にうきながら手首に食いこむツメに必死にたえていた、あのときの痛さは忘れられない。そんなことから、母親は野々歩の気持ちに鈍感^{どんかん}なところがある。そのせいで何度も傷ついてきた。わかつてもらえとは思えなかった。なのになぜ、母親がこんなに恋しい^{こい}のか、自分でもよくわからなかった。

駅前^{かき}は閑散^{かんさん}としていた。ネコ一匹きかない広場に山からの風がふきおろし、色づきはじめた桜の葉っぱを転がしていた。ひとりでこの町におり立つのは、はじめてだ。

——もうすぐお母さんに会える。ぎゅっと心臓が縮まった。うれしい、怖い。

へ い へ

三叉路に三角形の不思議な形の建物を見つけた。壁にはられた雑誌の広告もすっかり陽に焼けている。その中に一枚だけ、まだ新しいポスターがあった。森の中で笑っている子どもたちの写真。ひとりひとりが、（４）みたいなキラキラした笑みをうかべている。その笑顔にひきよせられ、野々歩は足を止めてしばらく見入った。

「森のようちえん コロボックル」木切れでかたどった文字で、ポスターのはしっこに書かれていた。「森のようちえん」って、どういうこと？ クリーム色のバンが目の前を横ぎった。ボディに「森のようちえん コロボックル」とあった。

——あ、あのポスターの幼稚園だ。興味をひかれた野々歩は、思わずバンの後を追って走りだした。あのきらきらした笑顔の子どもたちに出会ってみたい。そう思ったのだ。後部に「幼児バス」と書かれたステッカーがはられていた。

バンはゆつくりと、「町民グラウンド」と案内板のある広場へ入っていった。離れたところから見ていると、バンのドアが開いて子どもたちがとびだしてきた。よく見ると、Ｔシャツもズボンも泥だらけで、ほとんどの子は顔にまで泥をつけている。そのときだった。

「うそー！」思わず声がでた。大きな鍋をかかえて最後に車からおりてきたのは、なんと母親だった。

——お母さん！

へ う へ

「野々歩！」先に声をあげたのは、母親だった。グラウンドのすみで立ちつくしている野々歩を見つけると、目を見開いて駆けよってきた。「どうしたの！ びっくりするじゃない！」くしゃくしゃの顔で抱きつくとうとするのを、かかえていた鍋がじゃまをした。

「うわあ、うれしーい。野々歩が来てくれるなんて、思いもしなかった」と、野々歩の肩に自分の肩をぶつけてはしゃいだ。あまりに意味不明の展開にぼうぜんとしながら、それでもそぼくな疑問を口にした。

「お母さん、『森のようちえん』ではたらいてるの？」

「違う、違う。ただのボランティア」

——え？ ボランティアって？ もっとつっこみたいのに、母親はそれどころじゃないってようすで野々歩の全身をながめまわした。翌朝。

「野々歩お」ドタバタ走りまわる母親の足音で目を覚ました。

——うるさいなあ。そっか、「森のようちえん」に行くんだった！

すでに幼稚園バスは止まっていた。

「おはようございまーす」野太い声とともに車からおり立ったのは、ひげを生やした若い男性だった。

——え？ この人が保育士？ 野々歩はびっくりした。頭に巻かれたタオルといい、体になじんだ上着といい、どこからどう見ても山男だ。「森っち、娘が見学したいというから連れてきたんだけど、いいかな？」

声をかける母親に、ホワイトボード片手に目視で出欠を取っていた男性は、「了解でーす」とこたえて、ちらりと野々歩に目をやった。愛想はないけれど、イヤな感じはしなかった。どうやら拒否（きよ）されてるわけではなさそうだ。

へ え へ

もう一台到着したバンには、女性の保育士が乗っていた。

「あの人はゆりっぺ。若いのに優秀（しゆう）なのよ。ふたりのコンビネーションはサイコー」と耳もとで母親がささやいた。見ていると、指示もなにもないのに子どもたちはさっさとバスに乗りこんでいく。とてもスムーズな動きだ。

——まじ？ なんて？ 野々歩の経験では小学校でも中学生になった今でも、遠足なんかでバス移動となると大さわぎだ。

「はい、一組から順番に乗って」「押さない。静かに」マイクごしの先生の指示と怒声（どせい）が鳴りひびく。なのに、この子たちは先生の指示などなくとも自主的に動いている。

「行（い）ってらっしゃーい」家の人たちに見送られて、バスはさりげなく出発した。

山肌（はだ）をなめるように、薄（うす）いベールのような霧（きり）があがっていく。その上の空は、すっきりとした青空。深緑色の山と空とのコンビネーションが美しかった。それに後続のバンも到着して、とまどっている野々歩をよそに子どもたちはつぎつぎと下車（げ）しはじめた。整列も点呼もないまま道からそれで、吸いこまれるように山道に入っていく。汗（あせ）だくになりながら、ようやくみんなに追いついた。

昔、神社があったという場所は広っぱになっていた。木と木のあいだに、まるでクモの巣みたいな巨大（きょ）なロープネットがはられていて、そのうえで何人もの子どもたちが遊んでいた。霧が晴れたあとの森は、色とりどりのTシャツ姿の子どもたちで、まるで花がさいたみたい（はな）に華（はな）やいでいた。「く」の字や、「し」の字、中には「ん」の字になった子どもたちが、あちこちの枝にぶらさがっている。小鳥のさえずりに混（ま）ざって歓声（かんせい）が森にこだまする。なんだかとても幻想（げん）的で、絵本の世界にまぎれこんだみたいだった。

いつのまにか子どもたちは一斉に帰り支度をはじめていた。リュックを背負い、すでに歩きだしている子もいる。指示もないのになんで？とりあえず野々歩もみんなにならってスニーカーのひもを結びなおし、リュックを背負った。通学用のスニーカーは泥と落ち葉にまみれて見るも無残な姿だった。

——あした、学校どうしよう。あせりに胸が b。考えたら、いつもいつもあせていた。宿題、はやくやらなきゃ。あしたのテスト勉強、どうしよう。友だちからのラインにまだ返事してない。即レスが暗黙のルールなのに。そういえば、野々歩のまわりは暗黙のルールだらけだ。ひっかかったり、とまどったりしている間はない。すぐに置いていかれる。学校ってところは待ったなしなのだ。

「さあて、どこからおる？」「ガケのコース！」「ガケ、ガケ、ぜったいガケー」輝くんが枝をふりまわして興奮している。子どもたちのあとについて森をぬけると、いきなり視界が開け、霧の晴れたあとの真っ青な空が目の前に広がっていた。そして足もとへ目を移すと、そこにはいきなりの切り立ったガケ。

——まさか、ここをおるの？ ずるずるあとずさりする野々歩を尻目に、子どもたちはつぎつぎとガケの先端からとびこんでいった。よく見ると、黄色いロープが一本ぶらさがっていて、それをたぐりながら、はねるようにおりていく。

キャッホー、キャッホー。野々歩のみぞおちがギュッと縮んだ。だけど、なぜか目が離せなかった。女の子もふくめて、ほとんどの年長さんはおりてしまったが、ハルくんやエリちゃんたち年少の子たちはへっぴり腰でこわごわ上からのぞきこんでいる。

「どうする？」柴のとびでたリュックを背負ったゆりっぺの声かけに、ハルくんは、
「もどる！」と即答すると、来た道をさっさとひきかえしはじめた。

すぐにエリちゃんとはかの子たちもつづいた。どうやらコロボックルでは決めるのは子どもたちらしい。

——そうか。ひきかえすという手もありか。ところが、ハルくんたちを追ってもどりかけた野々歩の足が、なぜか止まった。うしろをふりかえると、ハルくんたちの姿は消えていた。今、野々歩はひとりつきりでガケの上にたたずんでいた。だれの指示もおおげない。

——どうする？ 自分で自分に問いかける。野々歩の中で、少しずつなかがうごきはじめていた。今までは周囲にあわせていれば、なんとかだった。ここでのなをいうのが正解で、どうすればうかずにすむか、そればかりに気をとられていた。だけど今、たずねる相手は自分だけ。どうする？ 野々歩。

「とぶ」声にだしたとたん、心が決まった。それで気がついた。

——わたし、ほんとうは、とびたかったんだ。野々歩はおそろおそろうしろ向きになると、みんながすがつておりていたロープを手に取った。意外と細い。あとは一步を踏みだすだけ。だけどどこに？　ガクガクふるえる足が宙をさまよった。

「足もとだけ見るんだよ」いつのまにか散らばって遊んでいた子どもたちが集まって、ガケの上でかたまっている野々歩を心配そうに見あげている。「ロープをしっかりとぎって、足を乗せられるくぼみをさがすんだ」ロープにしがみつき、うしろ向きにおろした足先でこわごわくぼみをさぐる。

——うー、もう限界……。泣きそうになったとき、スニーカーの先がやわらかい土の感触をとらえた。

——え？

「イエーイ」歓声があがり、子どもたちのとびはねる姿が目に入った。

——おりられたんだ。とんとんはねて地面の感触をたしかめる。野々歩は、あらためてガケを見あげた。やっぱり高い！

——すごいじゃん、わたし。やるじゃん。ふつふつとうれしさがわいてきた。それといっしょにほこらしさも。野々歩はふいてもふいても、ふきでる汗を肩口でぬぐった。

全員が合流したのは、ガケの上から屋根だけ見えていたログハウスだった。入り口に細枝で「コロボックルハウス」と書かれている。ログハウスのまわりは、森の中にぽっかり空いた大広間みたいだった。赤や黄、色とりどりの落ち葉のじゅうたんが敷きつめられている。近くに川があるのか、さらさらとやさしい水音もひびいてくる。

——こんなところがあったなんて知らなかった。

野々歩は両手を広げて空をあおいだ。深く息を吸いこむと、山のしめった空気が肺いっぱいになり、なぜか目尻に涙がにじんだ。

——なんていい気持ち。ずっと息をつめて暮らしていた。だれかの視線、だれかのささやき、だれかの吐く息、だれかの悪意。そんなものにばかり神経をとがらせていた。そのうち、どんどん自分の輪郭が薄くなつて、透明人間みたいになっちゃうんじゃないかと、怖かった。

Bここではみんな自分が主人公だ。開かれているのだ。心も体も。野々歩は、カタツムリみたいにすぐにひっこんでしまっ自分すいを小さいと感じた。

薄暗い林道に黄色いワンボックスカーが止まっていた。中から大型犬がとびだしてきて、そのあとから大きな炊飯器をかかえた女の人が、よたよたとおりてくる。年長さんたちは、うばいあうように炊飯器を受けとると、「よいしょ、よいしょ」とかけ声をかけながら広場めざして運びあげていく。大きな寸胴鍋すんどうやアルミ皿もあって、なかなか大変そうだ。だけど、おとなたちはだれも手をかそうとしない。子ども

たちの手で着々と「森のレストラン」の準備が整えられていく。のんびりしているのは野々歩とおとなたちだけ。小さなハルくんやエリちゃんもなんらかの仕事を見つけて動きまわっている。炊飯器の中身はいろいろどり豊かなピラフ、寸胴鍋は予想どおりミネストローネスープだった。

食の細くなっていた野々歩も、近ごろではめずらしくたくさん食べた。

あと片づけも全員でするらしく、「うんしょ、うんしょ」年長さんも年少さんもいっしょになって炊飯器や鍋を川まで運び、タワシでごしごしすっていた。

雲の動きがはやくなった。風も冷たくなって、急にあたりが暗くなった。全員で山に向かって、「ありがとうございました」と頭をさげるころには、こずえにあたる雨が大きな音を立てていた。

「うーん、うーん」顔にあたる雨がうっとうしくて足をはやめる野々歩の後方から、なにやら苦しいような声がした。ふりかえると、あやめちゃんが、大きな炊飯器をかかえてうめいている。ハルくんとエリちゃんが手をそえてはいるものの、ほとんど助けにはなっていない。炊飯器を陽子さんの店にかえすために、幼稚園バスまで運ばなきゃいけないのだ。きびすをかえしかけた野々歩のカップを、ゆりっぺがつかんだ。

「放つといて」 え、なんで。この状況で知らん顔ってひどくない？

「あやめちゃん小さい弟や妹がいて、家でもここでもキャパオーバー（できる量をこえる）になるまでがんばり過ぎちゃうの。がんばるのはいいことだけど、

「真剣けんそのもののゆりっぺの表情にけおされた。プロの目だ。森っちも、ゆりっぺも、ゆるく見えて、じつはものすごくよく子どもたちを観察している。

「……生きてるといろいろあるし、人間はひとりじゃ生きていけないでしょ」肩を怒らせて先を行くゆりっぺが、低い声でつぶやきはじめた。雨音がじゃまをして聞きとりにくい。「わたし、意地っぱりですと助けてっていえなかったの。そのことで、かえってまわりにめいわくかけちゃったんだけど、いえたら必ず助けてくれる人っているんだよね。そのことをあやめちゃんにも知ってほしい」クールに見えるゆりっぺが熱く語っていた。それが野々歩の胸にささった。

——え？「助けて」っていうのは負けじゃないの？

雨はますます激しくなっていた。ゆりっぺと並んで歩きながら、野々歩は混乱した頭で、背後のあやめちゃんの気配に耳をそば立てていた。

そのときだった。

「うわあーん。重いよお、だれか持ってー」風船が破裂したような泣き声が林にひびきわたった。あまりの大声に、あたりの枝がふるえて水滴がしたたった。

「いえた！」野々歩とゆりつぺが顔を見あわせたと同時に。林道をぴちゃぴちゃと、泥水をはねとばしながら駆けもどってくる子がいた。輝くんだ！「ごめん、あやめちゃん。持つよ」「えっ、えっ、ありがとう」しゃくりあげながら、あやめちゃんはお礼をいった。顔は雨と涙と鼻水でぐしょぐしょだ。よほどほっとしたのだろう、「ふうー」というため息とともに落とした細い肩がいじらしかった。

——よかったあ。野々歩ののがつまる。横目でうかがうと、ゆりつぺも手の甲で鼻をこすっていた。

コロボツクルのみんなとわかれて家に帰った。体がすっかり冷えていた。車で十五分ほどのところに温泉があると母親が言うので、さっそくでかけることに話がまとまった。体中の筋肉が強ばっていたから、温泉と聞いただけでほおがゆるんだ。母親の車に乗りこむと、なつかしいにおいがした。

「どうよ？ コロボツクル」街灯もまばらな山道をけっこうなスピードで母親はとばしていく。

「疲れた」体もだけど、心がいそがしかった。いろいろなことにゆさぶられつづきの一日だった。

「パパとね、はじめて会ったの。今から行くぼんぽこ温泉で」いきなり話題が飛躍して、ダッシュボードにおでこをぶつけそうになった。母親っていつもこう。あっちこっちに話がとぶ。「ああ見えてパパ、学生時代にバンド組んでね。田舎の高校生だったわたしには、ベースギターかかえた姿がめっちゃくちや輝いて見えたの」「それで同じ大学に入ることにしたの？」「そ、死に物狂いで勉強してね。おばあちゃん地元の大学行けて猛反対だったけど」

「猪突猛進は、そのころからだっただね」「はっは。そうかもね」ふくめた皮肉はこの人には通じない。

「お母さんは猪突猛進かもしれないけど、立ち止まるのもありませんだよ」唐突にいわれた。

「ひきかえすのもありだし、逃げだすのもあり。自分を守るためなら、なんでもあり。えらそうにいつちゃったけど、これみんなコロボツクルの子どもたちに教えてもらったこと」と照れくさそうに笑った。それはきょう、いっしょに山を歩いた野々歩にもよくわかった。あの子たちいると、いっぱいいろんなことを考えさせられる。

しばらくだまりこんだあと、口にしたつばを飲みこんで野々歩はいった。「……スニーカーどろどろだし、しばらく学校休んで、

こっちにいてもいいかな？」口にだしたとたん、それは切なる願いになった。もう少し、ここにいたい。

「いいんじゃない。お母さんもううれしいわ」と、母親は口がさけそうな大きな笑顔を見せた。

母親と並んで全身を湯にひたすと、野々歩の口からもため息がもれた。熱くもぬるくもなく、ちょうどいい湯加減だ。

D₂
——なんかお母さん、変わったな。

「ところでお母さん、なんでコロボックルに行ってるわけ」ずっと聞きたかったことを思いだした。

「……うーん。自分でもよくわからないうちに、なんだか、あの子たちのとりこになっちゃったのよ。いっしょにいと、わくわくしてくるの」岩にあずけていた頭をもたげて、母親はまるで推しを見つけた女子高生みたいに瞳を輝かせた。

「わかるー」思わず声はずませていた。きょう一日いっしょに過ごただけで、野々歩の胸にもハルくんやエリちゃんがすみついている。「それとあの子たち見ると、いつい自分の子育てをふりかえらざるを得なくなつて、……正直、落ちこんだ」

突然母親の声色がしめりけを帯びて低くなった。——え？ なに、急に。

「……野々歩、お母さん、いいお母さんじゃなかったね。自分の気持ちばかり優先して、あんたのこと、ちゃんと見ていなかった気がする」弱々しく消えていく語尾も、いつもの母親のものではなかった。第一、今までこんなこといってもらったことがない。

「……乱暴だった。おばあちゃんにも、野々歩にも……。結局は、わがままなんだね」

風がでたのか、湯けむりが流れ、母親の表情は見えなかった。

「今のままの自分じゃだめだと思って、変わらなきゃと思って、……そうこうしているうちに時間ばかりが経っちゃって……」

「ごめんね」といわれ、「いいよ」とこたえた。

D₃
条件反射かもしれない。だけど、今回の長い不在が母親にとって必要な時間だったのならそれでもいいと思った。

よっぱど疲れていたのだろう、夢も見なかった。夜中に激しい雷の音がしていた気がする。けれど、それもさだかではない。

「雨がふってる！」こんな大雨の中、ほんとうに山に入るのかな。

全員が乗りこむと、すぐにバスは出発した。窓ガラスをたたき雨はますます勢いを増し、雷まで鳴りだした。稲光につづいて大きな雷鳴。野々歩の学校だったら、「きゃっ」って大さわぎになるところなのに、慣れているのかコロボックルの子どもたちは平然としたものだ。

バスからおり立った子どもたちは、等間隔に植えられた杉が整然と並ぶ林に入ってしまった。

「あ、川ができてる！」「ほんとうだ！前来たときはなかったのに」泥水をはねあげながら、みんなはいっせいに駆けだした。

杉林から流れてきた大量の水が、何本もの川をつくっていた。足もとは、ぬかるんでぐちゃぐちゃ。お兄ちゃんのぶかぶかのカッパのズボンははいてきている子がいた。最初はすそを折るのに苦労していたけれど、そのうち、川の中で水が入ると風船みたいにふくらんで楽しいのに気づいたようで、「見て、見て」とわざと水を入れてよろこんでいた。どうやら、ぬれるのをとことん楽しむのがコロボックルの雨の日の流儀らしい。

——これってどういう世界？あまりに自分が今まで属してきた世界と違いすぎて、思考が追いつかなかった。

コロボックルにいと、野々歩が十四歳の今まで身につけてきた常識というか、フツウと思ってきたことが、いとも簡単にひっくりかえされてしまう。なのに、それがこ①こちいい。これってどういうこと？場の空気を読んでの会話、行きたくもないのにつるんで行くトイレ、ラインには即レス。あれだけ自分が神経をとがらせてきたことのすべてが、なんだかどうでもいいことのように思えてくる。

「ああ」身をよじりながら天をあおいだ。開いたままの眼球に雨の粒がしみた。

いつのまにか子どもたちが移動をはじめていた。

「カエルみつけー」子どもたちはわくわくするものを見つけるのがじょうずだ。

——あー、また来週から学校かあ。思いだしたとたん、雨雲のような不安が胸に押しよせる。またあそこに帰るのか。やっていけるのか、緊張感に満ちたあの場所だ。

そのとき、近くでこぜりあいのはじまった。

「放してやれよ。かわいそうだろ」怒りをおさえた声がする。翔くんだ。見ると、圭くんが手の中になにか、にぎりこんでいる。ピンと伸びた脚がはみだしていた。カエル？

「つぶれるだろ！」あせった翔くんの声が裏がえった。だけど圭くんは、かたくにぎった手を開かない。いや、開けないのか？

「放せ！」半泣きになった翔くんが、とうとうじつりよくこうしにでた。窒息しかけのカエルを救出するために、懸命に圭くんの指を一本一本開かせようとしている。フリーズしたままつつ立っている圭くんの顔が赤くなる。そのときだった。

つつつと圭くんのそばによっていったヒメちゃんが、いきなり早口言葉をとなえはじめた。

「カエルぴよこぴよこ、みぴよこぴよこ。あわせてぴよこぴよこ、むぴよこぴよこ」

その瞬間、まるで魔法のように圭くんのフリーズがとけた。やわらかな表情がもどり、体の強ばりがとけた。急いで圭くんの手からカエルを救出した翔くんは、気絶しているカエルをてのひらにのせて、人差し指の先で心臓マッサージをほどこしはじめた。

「生きかえった！」たくさんの目が見守る中、カエルは水たまりにとびこんで元気に泳いでいった。

「ふうー」だれかのため息が全員の気持ちをだいべんしていた。なにをきっかけに圭くんがフリーズしてしまうのかわからない。だけど、三歳の圭くんには圭くんなりの歴史があつて、そうしなければ自分を守れないなにかがあつたのかもしれない。

圭くんとヒメちゃんの鈴を転がすような声を聞いていると、突然野々歩の胸に気づきが走った。

④—ときはなつのは自分。そのとき手助けしてくれる人は、かならずいる。さっきのヒメちゃんみたいに。

—わたしもやれるかも。野々歩にはそれが希望の光に見えた。

翌朝。

縁側からさしこんだ光が畳の上でゆれていた。しめった土のにおいが濃く立ちのぼってくる。すっかり勢いをなくしたツクツクボウシの声にヒグラシの甲高く澄んだ声が重なる。

⑤—あー、あさってからまた学校かあ。思いたすと一気にゆううつになった。いくら換気のために窓を開けていても教室の空気は重い。いろいろなせいやくにみんなイラついている。自意識と自意識がぶつかりあつてあちこちで火花が散る。

—安全安心っていうけど、わたしたちって、ほんとうに守られてるんだろうか？ 根本的な疑問がわいた。野々歩たちの守られ方とコロボックルの子たちの守られ方はまるで違う。それって、子どもたちを信頼してることじゃないだろうか？

野々歩の脳裏にコロボックルで一瞬一瞬が、つぎつぎとうかんできた。どれもこれも大切なワンシーンだ。

F—この思い出が、きつとわたしをささえてくれる。そんな確信が野々歩の体の芯からわきあがった。

（八束澄子「森と、母と、わたしの一週間」より）

〔二〕 つぎの文章を読んで、別紙の問題に答えなさい。

私たちは皆、言葉とともに生きています。言葉で知り、言葉で考え、言葉で表現します。つまり、言葉が私たちの人格を形作っているという言い方もできます。

今の時代、電車に乗っていても以前のように本を読んでいる人を見かけることが少なくなってきました。本や雑誌に親しむ人も少なくなってきたようです。けれども、文字を読むことが少なくなってきたのかというところでもありません。私たちは日々、インターネットを通じて非常に多くの文字に触れています。

確かに言葉とのつき合い方は変わってきました。現在の私たちは、^Aの通信をして、^Aの言葉に接しています。SNSやメールでも^Aの言葉を受け止め、発信しています。以前に比べて読書量は減り、手紙をしたためることは少なくなっても、言葉とつき合う時間、量そのものは格段に増えているのです。

以前は、自分のまわりに五人十人の人がいて、その人たちとコミュニケーションすることで一日が終わるのも普通だったとすれば、現在はその桁が違うことになります。たとえば、一日中家から一步も出なかったとしても、です。連絡先にしても、百人以上の電話番号、メールアドレスが入っているのは当たり前前の状態です。以前は、記憶している電話番号が五件か十件程度だったのではないのでしょうか。常時連絡を取り合う相手も増えていきます。言葉が^Aに入ってきて、自分からも出てゆく。そんな状況の中で言葉の[B]いるような状態です。AIも登場して、AIと対話のようなやりとりをする状況も生まれました。

いよいよ^Aコミュニケーションの時代に入ったということでしょう。ある意味、（C）コミュニケーションの時代でもあります。

友だちがいるのはとても素晴らしいことです。では、友だちとともに何をするのかというと、多くの場合、話をするわけです。遊ぶにしても食事をするにしても何かを見に行くにしても、そこに会話があるから一緒にいることに意味が生まれるのです。そこに言葉があるから、友情は深まり、時間が充実したものになります。ひとりで寂しいと思った時には、読書を趣味にする人は多少なりともその寂しさを和らげる手段を知っていることになります。なぜなら、読書は言葉を通じて先人の人格に触れることでもあるからです。

私たちは読書を通して、過去の優れた人たちとも触れ合うことができます。たとえば、ブッダやイエス・キリストなどの宗教家、孔子やソクラテス、プラトン、アリストテレスなどの哲学者の言葉は、二千五百年ほど昔のものであるにもかかわらず残されていて、今でも本で読むことができます。しかも、おおよその意味が通じるのです。

コミュニケーションは意味と感情を伝えるものと私は考えています。遠くはなれた時代の人同士で、感情を伝え合う身体的コミュニケーションは不可能であったとしても、言葉によって意味を通じ合うことはできるのです。その言葉が楔形文字や甲骨文字で書かれていても、意味は時空を超えてちゃんと今の私たちに届くのです。それが言葉の面白さです。

言葉というのは、文字として残ることで、人の命を超えて残っていくものです。そうして残った言葉が、その後を生きる人の魂に影響を与えて、精神というものを形作ってきたのです。これが「言霊力」です。

昔の寺子屋では、仏教や儒教の考え方を基本にした『実語教』『童子教』をテキストにしていました。そこには、いかに学ぶことが大事かということが書かれています。人は外見ではない。山は高いからいいのではなく樹があるから偉いのだ。樹というのは知識、知恵なんだ。勉強するから豊かになって人の役に立つのであって、見た目なんか全然関係ない。お金なんて関係ない。知恵なんだ。と、そのような言葉がずっと続きます。それを、皆が読み、暗唱していたのです。

すると、人の価値は背の高い低いでもなく、見た目の良し悪しでも、身分の上下でもなく、学んだかどうかんだという考え方が皆の共通見解として身に染み込みます。ある意味、国の向学心のおおもとがそこでできていたのです。ですから、上の学校に行って学びたいという思いを持っていた人が多く、境遇に恵まれずに学校に行けない人でも、なんとかして学校に行きたい、学びたいと考えていました。そんな価値観が共有されていたのです。なかなか今の時代それが共有されていないのは向学心をかきたてるテキストが共有されていないからなのではないかと思っています。子どもの頃から、価値のある言葉を身につけていけば、そんな気分にもなるのではないのでしょうか。

たとえば、「雨ニモマケズ」を暗唱して覚えていると、どこかで自然と「そういうものに私はなりたい」と口にしてしまったたりすることがあるでしょう。自分の中の一部にするための言葉とのつき合い方は暗唱です。暗唱文化が私たちからはなれてしまったことで、言葉とのつき合い方が薄っぺらになってしまったのかもしれないと思います。いい言葉、自分の好きな言葉を探して、触れて、声に出してみることに

を意識して、言葉との深いつき合い方を改めて始めてみていただけるといいのではないかと思います。

兼好法師は『徒然草』の中で「達人の、人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず」、つまり達人が人を見る目は少しの間違いもないのだ、と書きました。兼好法師は、市井の達人に興味があったようです。「能をつかんとする人」という話もあります。能をしようとする人は、人に見られるのを恥ずかしがっているのはダメで、どんどんやらなくともうまくならない。恥ずかしいなどと言っている人が、何かを身につけることなどできないと、なかなか手厳しいことを言っています。

私の授業では、学生が皆の前で知的コントをするという課題があり、中には恥ずかしがって前へ出たくない人もいます。けれども、やらなければ慣れません。そこで「まあまあ、兼好法師もこう言っていることだし、まずはやってみよう」などと声をかけています。そんな時、言葉は時代を超えて普遍性^{ふへんせい}すべてのものに通じる性質を持つているのだとつくづく感じます。優れた言葉は、実は決して古びることはないのです。これが言葉のパワー、「言葉力」です。

「言葉」は古い時代の言葉にばかりあるわけではありません。

現代には現代の「言葉」があります。ニュースのコメント欄^{らん}などを見ると、気の利いた言葉がリアルタイムでどんどん生まれています。時代の空気が変わって、言葉を伝える形式が変わっても、いい言葉のセンスや感動は共有できます。もちろん、インターネット上には玉石混交、質のいいものからそうでないものまで、言葉があふれています。その中で、自分の魂にハッと響く^{ひびく}、新しい言葉に共感できると、今の世界に対して肯定的な気持ちになれるでしょう。自分なりの信頼空間を、今のこの世界に持つことは大事だと思います。

今の世界に対する信頼感と、先人に対するリスペクト、そして自己肯定感。言葉に触れることで、それらが醸成^{じようせい}されるのではないかと思います。媒体^{ばい}を問わずあらゆる言葉に親しむと、人格にも深みが生まれます。いろいろな手段を通じて、現代の言葉、生きている言葉のセンスを吸収していただきたいと思うのです。言葉と出会う瞬間も、新しい世界が開けるような時間になると信じています。

（齋藤孝「言葉を愉しむ」より）